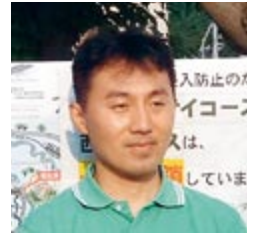


# ボランティアと自治体が協働で取り組む 「フットパスによる 道づくり・町づくり・人づくり」



黒松内町フットパス  
ボランティア事務局  
(黒松内町環境政策課)  
中嶋 貴久さん

## ブナ北限の地を体感できるフットパスコース

昨年10月に開通した歌才森林公園コース（約4km）は、既存の公園内の散策路の一部を利用したフットパスコースとなっており、天然記念物である歌オブナ林の入口に接しています。なだらかな丘陵でブナなどの広葉樹が生い茂る林の中を通るコースは、黄葉が楽しめるこれからの季節が歩くのに一番適していると言えるでしょう。

このコースの他、のどかな田園風景を眺めながら歩くことのできるコース、小さな山を超え川沿いを歩いたりする景色の変化に富んだコースなど全4コースがあります。このように「歩く小径」といわれるフットパスが黒松内町でどのように整備されてきたのか以下ご紹介したいと思います。



ブナ林へ通じる歌才  
森林公園コース

## 活動拠点の概要

私たちの活動拠点である「黒松内町」は、北海道南西部にあり、札幌市と函館市のほぼ中間点に位置します。北は日本海、南は太平洋に挟まれ、それぞれの海岸まで直線距離で約28km。ただし、両海岸線は海まで僅かなところで隣町になるので、本町は海岸の無い町です。

黒松内低地帯と呼ばれる丘陵地帯では全ての河川水が朱太川水系に集約され、支流である中小河川によっ

て形成された小規模な平坦部では酪農や種子馬鈴薯を中心とした農業が営まれています。

## まちづくりの歩み

黒松内町の中央部には北限のブナ原生林である天然記念物「歌オブナ林」があり、面積92haの国有林です。ブナの北限地帯に原生林が残っていたこと、さらに市街地から近く研究活動などでの行き来が容易なことが学術的に高く評価されて、昭和3年に国の天然記念物になりました。

町は、歌オブナ林を核とした豊かな自然環境と農村の生業が生み出す牧歌的風景を潜在的資源と位置付け、可能な限り地域内の人材・資源を活用し、都市の人々を招き入れ交流を図る体験・滞在型のまちづくり「ブナ北限の里づくり」を平成元年にスタートさせました。

週末や長期休暇を田舎でのんびりと過ごすヨーロッパの習慣を取り入れるため、平成3年に自然体験学習宿泊施設「歌才自然の家」が整備され、ブナ林散策、子どもたちの野外活動の宿泊拠点がつくられました。

平成5年以降は、体験工房を備えた野外活動の中心になるブナセンター、オートキャンプ場、温泉の順に拠点となる交流施設が整備されるとともに、ブナ林観察会、ビーフ天国、かんじきソフトボール大会など、黒松内の地域特性や生活文化を生かした様々なイベントも開催されてきました。

加えて、地場の農産物に付加価値を加える形で、「特産物手づくり加工センター」製チーズ、アイスクリーム、ソーセージ、「特産物展示販売施設(道の駅)」製パンやワインといった、オリジナルの味をそろえ、来訪者のもてなしに力を注いでおり、現在では約15万人の交流人口となっています。

また、北限のブナ林や美しい農村を次代に引き継ぐため、景観や環境を保全するための条例を制定し、奨

励制度を設けて住宅の色彩配慮や  
廃屋撤去などの修景整備にも取組  
み、昨年3月には、景観行政団体  
となり、一層優れた農村景観づく  
りが進められています。

## まちづくりから 生まれたフットパス

こうした取組みによってまちの  
魅力が向上するにつれて、交流だ  
けでなく移住する方々が現れ始  
め、移住者による民宿や環境雑貨  
店の経営、木工や食品の製造など  
といった経済活動のほか、地域内

でのコミュニティ活動などが盛んに行われるようにな  
り、まちの人材と資源は一層増えてきました。

しかし、交流人口の多くは通過型ドライブ観光で、本  
当のまちの良さを分かっていたいておりませんでした。

イギリスでは、国内に自然発生した小径「フットパス」  
がくまなく張り巡らされ、美しい自然景観、懐かし  
い田園風景、古い街並みを結び、多くの人々がその  
フットパスを余暇として歩き楽しんでいます。

本町においても、「歩く」スローな視点から車では  
見過ごしがちなまちの自然や環境のすばらしさを満喫  
してもらい、既存の魅力ある地域資源としての交流ス  
ポットを有機的に結び付け、一層魅力あるものにする  
ため、イギリスのような「フットパス」を整備するこ  
とが有効と考えました。

そして、平成16年1月町長の諮問機関である「まち  
づくり推進委員会」からの意見を受け、町広報誌でフッ  
トパスの紹介を兼ねてボランティアを募集し、同年6  
月当ボランティアを組織して、フットパスの取組みを  
スタートさせました。

## 資源を結ぶフットパス

まずは、フットパスを実際に歩き、コース整備に役  
立てるため、本場イギリスへのフットパス研修等の先  
進地視察を実施、次にフットパス化可能コースの選定、  
そして、これまで幾度もまちを訪れていた都市の方々の  
協力もいただいて廃道同然だった道路の笹刈り・草  
刈り作業などを重ね、ようやく最初のコースを整備し、  
平成16年10月に歩き初めのイベントを開催しました。

このコースは、黒松内市街地と白井川地区に挟まれる  
東山を越える起伏に富んだ「チョボシナイコース」  
で全長約10km、道端では小動物の足跡やヤマブドウ・



チョボシナイコース

コクワといった実のなる木などがあり、とても魅力的  
な自然に接することができるコースです。

翌年には、チョボシナイコースに廃材を利用した手  
づくりの道標を整備しましたが、案内プレートの進行  
方向は普通の矢印ではなく、ボランティアスタッフの  
アイデアを採用し足跡の向きで示しました。

さらに、平成16年に第2のコースとして現地を歩いて  
調査した上で、歌才自然の家から特産物手づくり加工  
センターまでのなだらかな草地在ががり本場イギリス  
を彷彿させる「西沢コース」(約10km)を選定しました。

また、翌年8月には全道イベント「第4回全道フッ  
トパスの集い」を開催。同年11月、チョボシナイコー  
スと西沢コースに接続し、市街地を縦断する川沿いの  
遊歩道を歩くコースを第3のコース「寺の沢川コース」  
(約2km)として選定しました。

平成18年は、寺の沢川コースなどに36基の標識を整  
備、翌年は、各コースの起点・終点への手づくりコー  
ス案内看板の整備、フットパスマップの作成などを  
行い、初めての人でもマップを片手に安心して歩くこ  
とができるようになりました。

フットパスに取組んで5年目の節目の年を迎えた平  
成20年は、フットパスに関する国際的イベント「フッ  
トパス国際フォーラム in 黒松内」を開催しました。

フォーラムには、本場イギリスのウエールズランブ  
ラーズ協会からフットパス監督官を招聘して、フット  
パス本来の思想や歴史、楽しみ方、イギリス国内にお  
けるフットパス事情などを分かりやすく講演していただ  
いたほか、国内で先進的に取り組まれている方々との  
パネルディスカッション、各地の事例発表、全コー  
スのフットパスウォークなどを行い、全国各地から  
100名を超える参加者がありました。





道標設置

昨年は、冒頭で紹介しました「歌才森林公園コース」が開通し、初の周遊コースとして人気のあるコースとなっております。また、以前よりチョポシナイコースの途中でトイレの設置を要望する声が多く、設置場所の検討をしておりましたが、コースの近くで牧場を営みされている方に快く土地を提供していただき、水を使わないおがくずを利用した環境にやさしいバイオトイレが設置されフットパスコースを快適に歩くことができるようになりました。

これら総延長約26kmのフットパスコースの整備によって、歌才自然の家を利用して1泊2日で町内に点在する各交流施設や移住者のお店、豊かな自然と優れた景観など、まちの魅力を存分に楽しめるようになり、フットパスによる体験・滞在型観光の基盤が固まりました。

## 都市と農村の交流を広げるフットパス

このようにフットパスが注目を浴び始めた最中、全国でフットパスを活用して地域おこしに取り組む本町を含めた3市2町とNPOなどの6団体、1個人がフットパスによる体験・交流型の観光振興を目指し、フットパスを全国に普及するために初の全国組織「日本フットパス協会」を昨年2月に発足させました。

東京都町田市で開催された協会設立記念シンポジウムには当会から7名が出席し、国内における活動家の1人として新川会長がパネルディスカッションのパネリストに選ばれ、鉄道の枕木を再利用した案内板の整備のほか、除草作業、道標補修、イベント開催など、ボランティアと町の協働によるフットパスの本町での活動事例を来場者に紹介しました。

このように当会では、今ある道を活用し、下刈りするなどして、自然に負荷をかけることなく新たに歩くことのできる道を見つけ、作ることを町と手を携えながら一緒に汗を流してきました。

6年間地道に取り組みを積み重ねた結果、近頃はイベントやフォーラムの記事が新聞・雑誌に大きく掲載され、全国放送ラジオにも出演して取組紹介したことで、

当会の活動や「フットパス」という言葉、そしてまちの魅力が、一躍全国的に広がりました。コースやイベントに関する問い合わせや活動の取材を受ける機会が一段と増え、フットパスを歩き楽しむために週末や祝日を問わず平日でも都市や近隣町村からまちを訪れる方の姿をコース上で見かけるようになりました。

今年5月、本町で2回目の開催となる「第12回全道フットパスの集い」には120名を超える方が参加され、ある参加者からは「黒松内のコースは本当に歩きやすく、また人もやさしいので何度でも歩きたい」といったうれしい声も聞かれ、実際フットパスで結ばれた点在する交流スポットでは経済効果が生まれ始めています。



多くのフットパス愛好者が集まった全道フットパスの集い

そして、これらの活動の中から、イベント時や初めて歩かれる方などにガイドとしてボランティアが同行したり、ボランティアの1人が地元産の根曲がり竹を使用したフットパス用手づくりストック「アルカサル」の販売を始めるといった取組みも生まれています。

## 地域と密接な関係にあるフットパス

今年宮崎県で発生した口蹄疫の問題を受け、本町では侵入対策の上から農場敷地を通る2コースの一時閉鎖を決定しました。基幹産業である酪農を守るための措置ですが、このことからフットパスが地域と深く関わっていることを知ることができます。

このように当会のフットパス活動は、点在する地域資源を結び付けるとともに、人と人の交流によってまちづくりの原動力となる人を育み、成長させるなど、大きな成果を挙げています。

今後は、初めて歩かれる方でも容易にコースが分かる専用マップの作製、フットパスコースを歩いた後の交通手段の確保などフットパスコースを歩かれる方がより楽しく安心して歩くことができるよう環境整備に力を入れ、また近隣町村とも連携しフットパスコースが町内だけをつなぐのではなく「まち」と「まち」をつなぐ道となれるよう努力していきたいと考えております。